

平成 21 年 4 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520041

研究課題名（和文） 宋代道教儀礼書と現代台湾の道教儀礼

研究課題名（英文） Taoist Ritual Books in Song period and Taoist Rites
in present Taiwan

研究代表者

松本 浩一 (MATSUMOTO KOICHI)

筑波大学・大学院図書館情報メディア研究科・教授

研究者番号：00165888

研究成果の概要：

研究代表者の松本は、台湾北部道士の儀礼特に普渡儀礼についての調査を進めるとともに、その成果の上に立って宋代の普渡文献について研究を進め、普渡儀礼における孤魂概念の変遷や普渡文献の基本的構成とその思想的背景、社会的受容について明らかにした。研究分担者の丸山は、台湾南部道士が資格を得るための儀礼である奏職に際して用いる文検の地域的特色や、煉度儀礼における生死論の道教的特色について、宋代の道教文献と対照しながら明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：道教

1. 研究開始当初の背景

(1) 台湾の道教の伝統は大きく分けて、西は新竹県から東は宜蘭県を結んだ線によって、北部の伝統と南部の伝統に分かれる。北部の道士は醮やその簡略版とでもいうべき礼斗法会など大規模な儀礼を行うほか、普段は祭解や補運などの解厄・改運を目的とした小呪術や、孤魂の救済を目的とした普渡を行う。南部の道士は醮や礼斗法会を行うことは共通しているが、日常的な収入を得る手段としては、葬儀の際に功德と呼ばれる儀礼を行うことにあり、北部の道士が行うような小呪術はあまり行わない。さらに彼らの行う醮の内容はかなり異なる。研究代表者及び分担者は、従来からそれぞれ台湾の北部、南部の道士の

行う醮や礼斗法会あるいは小呪術や功德などの儀礼、および儀礼に使用する文検について実態調査を行うとともに、道士の教えを受けて儀礼内容や文検の構成を分析し、その歴史の変遷をたどった成果などを発表してきた。その過程で北部・南部ともに多くのテキストを収集し、研究代表者・分担者ともにそれぞれ北部・南部の道士と信頼関係を築いていた。また台湾の道教研究者とは、様々な機会に相互に道教の儀礼・歴史研究上の問題点について議論を行うなど交流関係を築いてきた。宋代の道教儀礼書については、現代台湾の道教儀礼の考察にあたっては、常にそれらを参照してきているほか、それぞれにそれらについての研究を発表して来ている。そして

何年かにわたり、宋代に成立した王契真『上清靈宝大法』の読書会を続け、それらを通じて各儀礼の思想的背景についても、この時代の道教儀礼書に見られる記述や解説を比較することによって検討を行い、さらに宋代の道教儀礼書相互の関係についての文献学的研究も進めてきた。

(2) 従来の研究では、現代台湾の道教儀礼の源流が宋代の儀礼書に見出せるものについて、既に指摘がなされているものもあるが、宋代の儀礼書について相互の比較を行った上で、その儀礼の論理構成や思想を明らかにし、後の時代への展開を考察することは行われていない。また宋代の儀礼書には、儀礼で用いるおびただしい数の文書が収録されているが、その現代への系譜をたどることも行われてこなかった。呪術儀礼は道教を形作る重要な要素であり、儀礼書の文献学的な研究を踏まえた上で、実態調査と歴史的研究の両者から研究を進めることが求められている。

2. 研究の目的

(1) 台湾北部と南部の道士の行う醮や礼斗法会に見られる諸儀礼のうち、それぞれに特徴的な儀礼を取り上げて、『道蔵』や『蔵外道書』などに見える宋代以降の儀礼書からの発展の系譜をたどり、それぞれの系譜を明らかにするとともに、それらがどのような思想に支えられ、どのような論理構造の下に現在見られるような全体的な儀礼を形作っているのか、さらにはそれらの儀礼が、各時代の人々にどのような期待の下に、どのように受容されてきたのかを明らかにすることを目的とする。

(2) そのためにはまず、現代台湾で見られる醮や礼斗法会の諸儀礼のうち特徴的な儀礼を取り上げて、科儀書と対応させながらその構成を詳細に記述し、さらに道士に教えを受けて個々の行為の意味や思想的な背景について解明することが求められる。また諸儀礼において用いられる文検について、収集し解読した上で、全体的な構成や地方ごとの違いについて明らかにする。

(3) 次に宋代の儀礼書について、相互の比較を行って、そこに記された儀礼の全体的な論理構成や、個々の行為の位置づけを明らかにする。宋代の儀礼書は大部なものが多く、かなりの種類が残されているが、特に現代台湾の道士の儀礼のうち、本研究で取り上げた儀礼と深い関係を有するものに対して注目し、いくつかの儀礼書の記述を比較しながら、全体的な構成原理や背景となる思想について明らかにしていくことを目的とする。その上で現在の儀礼への展開をたどることが求められる。儀礼に用いる文検については、現在の台湾における地域ごとの差異を明らかにした上で、宋代の儀礼書に見える諸文検との

比較によって、その歴史的な変遷をたどることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 台湾北部の道教儀礼については、礼斗法会に見られる早朝と普渡に注目する。これは礼斗法会についてはすでに映像資料と、いくつかの儀礼についての科儀書を手に入れていること、また普渡については、現在長期の調査が可能なのは夏休みに限られ、その時期が中元普渡が行われる時期と一致するため、調査が比較的容易なためである。早朝については、科儀書の内容と実際の儀礼における使用とを調査することによって、儀礼の意味を探り、合せて道士への聞き取り調査によって、個々の儀礼の意味付けと思想的背景を明らかにする。また早朝を構成する諸儀礼の中でも、たとえば飛罡については、宋代の儀礼書にその源流が指摘されているものがあるので、それらの儀礼については、特に宋代の様々な儀礼書において、その記述にどのようなヴァリエーションがあり、それらが現代の儀礼にどのような系譜をたどってつながっているのかを解明する必要がある。普渡については、台湾各地で様々な民俗と結びついていることもあり、台北市・基隆市地域の道士の儀礼の調査を進めるとともに、一方で宋代の道教・仏教の普渡について、個々の文献における儀礼の構成を、呪文や使用する符などに注目しながら比較分析し、それと現在の道士が行っている儀礼との比較を行う。さらに宋代の文人たちの残した疏文や青詞によって、普渡儀礼がこの時代の人々にどのように受け入れられ、捉えられていたかを分析する。

(2) 儀礼文検については、南部の道士が道長に就任する伝度奏職儀礼において用いられる文書の模範例文集である奏職文検について、台南・高雄地域のものを広く収集して、比較検討し、その分析に際しては、宋代以降の歴史的な奏職文検をも比較対照の範囲に入れる。さらに台南地域の大規模な道教式葬儀において行われる煉度儀礼に注目し、宋代の靈宝系統の儀礼書と対照しながら、そこに見られる道教独自の生死論について、その特徴を論じる。

4. 研究成果

(1) 現在台湾においては、中元節に廟や市場あるいは団地など様々な単位で普渡が行われる。「中元節の成立について」では、はじめに台湾の中元節（台南市郊外）と日本のお盆（成田市）の現状を実態調査の成果によって紹介して、中国の中元節が祀り手のない靈魂を意味する孤魂を対象とした普渡を行う行事となっていることを述べる。次にこの普渡の成立をたどり、六朝時代の盂蘭盆会が、

祖先の救済を目的とし、衆僧の供養を行う行事として出発しており、これに対応する道教の玄都大献経も同様の儀礼を説いていること、そして不空の翻訳とされる仏教の施餓鬼供養の経典『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』を紹介し、ここに説かれているのは餓鬼への供養であって、まだ孤魂一般を対象とする普渡にはなっていないこと、しかし同じ不空訳とされる『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經』では孤魂一般の供養に近づいていることを明らかにする。これによって基本的な仏教の普渡儀礼が成立し、さらに宋代になると、はっきりと施餓鬼から普渡に変化し、供養の対象が拡大した水陸齋も盛んに行われるようになる。そして普渡は中元節に行われるばかりでなく、道教・仏教の死者儀礼に重要な位置を占めるようになる。そしてその後孤魂の範囲が拡大し、明確になっていった状況を、『瑜伽集要焰口施食儀』、『修設瑜伽集要施食壇儀』などの仏教文献、『靈宝領教濟度金書』、金允中『上清靈宝大法』、『広成儀制水陸大齋普召孤魂全集』などの道教文献にたどり、仏教・道教の文献が互いに影響しあって普渡儀礼を発達させてきた状況を明らかにした。「中元節の産生與普度的變遷」は、この論文の成果の上に、さらに中元節に死者が地獄から解放されて現世に戻ってくるという、日本のお盆と共通した信仰の、中国各地における分布の状況を論じた部分や、仏教の普渡文献の構成を比較考察した部分などを加えて、中国語論文としたものである。

(2)「宋元時代的普渡文献」では、現在の台湾北部道士の行う普渡儀礼の構成を踏まえ、宋代から元代にかけて成立した『無上黄籙大齋立成儀』巻 29 - 巻 31、金允中『上清靈宝大法』巻 38「施食普度品」、『靈宝領教濟度金書』巻 60 - 巻 62「玄都大献玉山淨供儀」の三つの儀礼書に見える普渡儀礼の構成について、召魂・治療疾病・沐浴・施食・施食後の説教の各段階に分けて比較し、それぞれの儀礼書の特色などを論じた。三つの儀礼書に見える普渡儀礼は、その構造の上から見れば大差はないが、細部ではかなりの違いがみられ、使用される符や呪文も大体は共通に使用されているが、使われる順序はそれぞれ異なっていることが指摘できる。

(3)「宋元時代的道教普渡和其作用」では、『靈宝玉鑑』巻 33 - 巻 36 および『道法会元』巻 203 - 巻 206 に記された普渡についての一連の儀礼書を取り上げ、前論と同様にいくつかの段階に分けてその特色を考察した。『靈宝玉鑑』に記されたものは、前論で取り上げた三つの儀礼書より儀礼の実際の順序が把握しづらいものになっているが、構造は三つのものと大差ない。使われている符や呪文は『靈宝領教濟度金書』と多く共通する。特色としては、仏教の普渡の影響が顕著であり、

また現在台湾北部の道士が使用するものと同様の呪文が見られることがあげられる。『道法会元』のものは、やはり構造的には似通っているが、かなり簡略になっており、呪文に関しては他に見られない特徴的なものが多くみられる。この論文の後半では、南宋中期に活躍した楼鑰が、仏教・道教の儀式のために記した青詞・疏文から、この時代の人たちが、これらの普渡儀礼に何を求め、普渡儀礼をどのように捉えていたかを探った。その結果、死者の供養のために行われる儀礼においては、特に普渡儀礼ではなくとも、孤魂の供養という普渡の考え方が多く見出せ、死者の供養以外の目的で行われる儀式においても、普渡の意図が含まれていることがあり、普渡自体が様々な目的のために行われていたことなどを指摘した。しかし発表後の議論などにおいて、これらの儀礼書を同じレベルで取り上げることについて疑問が出て議論が行われ、今後はこれらの儀礼書の性格と相互関係について研究を進めることが課題として残された。

(4)「台湾北部紅頭道士の礼斗法会(1):早朝」は、2002年の4月に淡水鎮の廟で行われた礼斗法会のうち、早朝儀礼について儀礼の内容と唱えられるテキストについて紹介し、全体の構成と個々の儀礼の意味について考察したものであり、儀式の際に撮影したビデオに基づいて、儀礼の意味や背景の思想について李游坤道長に何回か聞き取り調査を行い、あるいは宋代の道蔵文献にその源流をたどった成果を示したものである。儀礼は(1)啓師(2)啓闕(3)入戸(4)発炉(5)請神(6)進表(7)転経(8)懺謝(9)復炉(10)放籙(11)出戸という順序で行われるが、入戸では三界を表わす外壇から、中壇、内壇へと昇っていくことが示され、また進表では星座のステップを踏みながら道士自身が天界へ祈願文をもたらす飛罡という儀礼が行われる。日本では南部道士の儀礼は紹介されているが、北部道士の儀礼は詳しくは紹介されていないので、その点は価値をもつが、飛罡など宋代に源流をもつ儀礼の、宋代からの系譜をたどる部分は、考察が不十分であったことが次の課題として残されている。(以上松本担当分)

(5)「道教伝度奏職儀式比較研究:以台湾南部的奏職文檢为中心」では、道教の道士が道長に就任する伝度奏職の儀礼において使われる文書の模範文例集である奏職文檢の内容を分析することを通じて、台湾の台南と高雄の道教の特徴を比較検討し、その異同の含み持つ意義について考察を加えた。この分析に際しては、南宋や元・明の歴史的な奏職文檢、および現代福建の民間の奏職文献なども比較対照の範囲に含めるようにした。奏職儀礼では、文檢に従って作成された文書が神々に発出されて、新たに道長となる道士と様々

な神々との間に盟約関係が結ばれるが、時代や地域ごとに、継承している伝統によって、文書の内容や数量が異なり、時代や地域の儀礼伝統の比較研究にとり非常に有用な史料であることを指摘し、特に台南の道教は靈宝法の伝統を多く受け継ぎ、高雄ではその他に三元閭山法など地方的な伝統を顕著に継承していることを明らかにした。

(6)「靈宝法煉度科儀敷座法言之生死論：以台南道教『無上煉度宗旨科』為中心」では、台南の大規模な道教式葬儀において行われる煉度の儀礼の中に、死者に対して道教独自の深い内容の生死の議論を聞かせる部分があるのに注目し、関係する以下のような問題点を整理し、宋代の靈宝法の道教儀礼文献の相關する部分も援用しながら考察を加えた。まず煉度儀礼全体の中でこの生死論が占める位置を示し、また台湾の台南のみでなく新竹や高雄の同じ系統の儀礼文献との異同も論究した。次に台南の生死論のテキストの分析を行い、この議論が依拠した典拠、頻用する語彙、全体的な議論の構造、道教独自の生死論の特徴について考察を加え、この生死論の意義を論じた。道教は儒教・仏教に比して、道教は生死について深く論じているが、その際には六朝の靈宝系経典あるいは宋代の煉度理論の枠組みが使われていることを解明した。そして今後は宋代の儀礼文献における生死論がどのような内容なのかを、さらに詳しく検討する必要がある。(以上丸山担当)

(7)道士の儀礼の調査については、松本は平成19年8月および20年8月に、台北市・基隆市において李游坤道長の普渡を中心とする儀礼を調査し、また儀礼についての教えを受け、20年の調査では実際に儀礼に参加し体験した。そして中央研究院民族学研究所・文哲研究所図書館において関連文献を収集した。また丸山は同じく20年7月に杜永昌道長の所有する奏職文検とその使用方法について、あるいは『度人経』の使用法や理解の仕方などに関する調査を行い、成功大学や台南大学図書館において関連文献を収集した。また19年の8月の調査の際に、台湾の研究者に日本で行っている王契真『上清靈宝大法』の読書会の進め方について紹介するよう求められ、19年12月には台湾師範大学において、松本・丸山が、台湾の道教研究者十数人に読書会の成果と内容について紹介するとともに、宋代の道教儀礼書と現代台湾の道教儀礼研究をどのように進めるかについて議論を行い、さらに中央研究院文哲研究所において、松本・丸山が現在の研究について発表した。20年5月に香港・中文大学で開催された「中國地方社会儀式比較研究國際學術研討會」では、松本・丸山とも論文を提出し報告を行ったが、その内容は文哲研究所における発表に基づいており、その際に出席していた

台湾の研究者との討論が反映されている。また20年12月に台北・政治大学で開催された「道教經典與儀式國際學術研討會」においても、松本・丸山ともに論文を提出し報告を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①松本浩一、台湾北部紅頭道士の礼斗法会 (1): 早朝、社会文化史学、52号、2009、印刷中、査読有

②松本浩一、中元節の産生與普度的變遷、民俗與文化、5号、5-24、2008、査読有

③松本浩一、中元節の成立について：普渡文献の變遷を中心に、改革・変革と中国文化、社会、民俗 (叢書現代中国学の構築に向けて [4])、日本評論社、2008、219-237、査読有

④丸山宏、不正の神の行方、アジア遊学、101号、72-80、2007、査読無

[学会発表] (計5件)

①松本浩一、宋元時代的の道教普渡和其作用、道教經典與儀式國際學術研討會、2008. 12. 27、台北・國立政治大学

②丸山宏、探討道教靈寶法煉度儀式敷座法言之意義：以高雄縣永安鄉調查功德儀式為中心、道教經典與儀式國際學術研討會、2008. 12. 27、台北・國立政治大学

③松本浩一、宋元時代的普渡文献、中國地方社会儀式比較研究國際學術研討會、2008. 5. 6、香港・中文大学

④丸山宏、道教傳度奏職儀式比較研究：以臺灣南部的奏職文檢為中心、中國地方社会儀式比較研究國際學術研討會、2008. 5. 6、香港・中文大学

⑤松本浩一、台湾的民間宗教者和他們的儀礼、中央研究院民族学研究所民眾宗教研究群系列講演九十六年度第四次討論會、2007. 8. 10、台北・中央研究院民族学研究所

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 浩一 (MATSUMOTO KOICHI)

筑波大学・大学院図書館情報メディア研究科・教授

研究者番号：00165888

(2) 研究分担者

丸山 宏 (MARUYAMA HIROSHI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：00229626